

## 成蹊大学図書館所蔵 夢野久作書簡 翻刻

浜 田 雄 介

日本文学専攻大学院生有志

〔1〕ここに紹介するのは、杉山泰道、後の夢野久作が、異母妹の森あや及びその家族に宛てた手紙である。

明治大正昭和の政界を黒幕として縦横に駆けた杉山茂丸には、夢野久作の実母ホトリや養母幾茂のほかにも何人かの女性がいたことが知られている。そのうちの一人が、福岡県築上郡に住んでいた森まつであり、茂丸とまつとの間に生まれたのがあやであった。

明治二十九年十月に生まれたあやは、母まつとともに祖父森武八の家で育つが、大正四年にまつを病気で喪う。その後、茂丸と久作との間にどのようなやりとりがあったか詳らかでないが、約一年後に今回紹介する夢野久作書簡の一（以下通し番号）が書かれ、久作とあやとの間に文通が始まる。あやは引き続き武八のもとに留まつたが、大正七年にはその武八をも喪い、以後はまつの弟にあたる森梅松の庇護下に置かれることとなる。二の長い手紙を認めた久作には、そのような事情への推察もあったであろうか。やがてあやは渡辺安雄と結婚、一旦は渡辺姓を称するが、結局安雄が森家の養子となった。久作の一家と森あやの一家は、以後も家族ぐるみでの交際が続いた。あやの長男である森順一氏は、夏休みに久作から英語を

教わったという。<sup>(2)</sup>

平成二十三年、成蹊大学は森家所蔵の「夢野久作・杉山茂丸関係書簡一括」を購入した。私たちは翌年より書簡の整理と解説を進めたが、茂丸書簡の多くに書簡本文と封筒との日付上の矛盾が見つかるなど、全体像の見通しは容易につかない。

夢野久作書簡は茂丸書簡に比べれば日付の矛盾は少ないものの、たとえば三の書簡は、当初、杉山茂丸署名、森武八宛ての封筒に入られていた。消印は三年一月五日と一月八日である。武八宛てとすれば三年は大正三年であり、まつも存命である。この年に久作から梅松宛てに、あやの縁談をめぐる手紙を出すということは考えにくい。よって封筒と書簡本文とは別と判断した。一方、三の書簡は単独で残され、封筒は見つかっていない。しかし本文の日付、そして文意と言葉遣いからは、三と同封されたものと推測されよう。これらの例に限らず、書簡本文と封筒との組み合わせは、本質的には推定の域を出ない。「瓶詰地獄」の世界である。

送付時期のほか、事実関係も翻字も調査途上で、今後訂正の可能

性があるが、しかしその今後の研究のためにも、知り得た情報は早めに公開するという判断をした。寛恕されたい。

今回紹介する書簡の大半は、大正五年末から八年にかけてのものである。「黒白」を舞台に執筆活動を開始し、結婚して香椎村に居を据えるなど、久作にとつては仕事と生活の基盤を確立する時期だが、公開されている日記や書簡に収録資料はなく、謎の多い時期でもある。伝記的事実のみではなく、例えば③の書簡の一節などは「押絵の奇蹟」を連想させようし、また書簡総体を通して、「妹」を描くことも多い夢野久作の想像力の源泉を探ることも的外れではなからう。あるいは資料という側面を離れ、これらの書簡自体、久作の人柄を伝える、すぐれた作品群と言えるかもしれない。翻刻の発表に際し、あらためて杉山家、森家に敬意と謝意を表したい。

注1 森あやの戸籍名は「森アヤ」だが、久作の手紙では「あや子」がやや多く、「あや」「綾」「綾子」が混在している。茂丸書簡でも表記の混在は同様だが、多くは「あや」と記されている。関係書簡に含まれる森あやの署名も「あや」であり、本稿でも「あや」と記すこととした。

2 森順一氏直話。浜田は、平成十三年四月二十九日に渡辺東氏、戸川宣氏、小松史生子氏、末國善己氏と、平成十七年九月五日に大鷹涼子氏と、それぞれ森家を訪問し、インタビューを行った。

3 杉山龍丸編『夢野久作の日記』葦書房、昭和五十一年。西原和海編『夢野久作著作集6 随筆・歌・書簡』葦書房、平成十三年。後者には森綾子に宛てた昭和七年五月五日の久作書簡が一通収録されている。

(はまだ・ゆうすけ 本学教授。大学院生有志として、市地英、伊藤浩平、井上崇、大谷邦世、小山恭平、河津澄江、岸本梨沙、九嶋ひとみ、蔡維鋼、佐久間藤子が参加した。)

## 凡例

翻刻にあたり、次のような処理を施した。

- 一、宛名書き、差出人書き、本文の改行は原文通りとした。
- 二、変体仮名は通行の仮名、漢字は通行の字体にした。仮名遣い、ルビは原文通りとした。
- 三、量字「々」は「々」に改め、「ゝ」「ゝ」は原文通りとした。
- 四、意識的な使い分けと思われる小字は原文通りとした。
- 五、誤字、脱字、衍字と思われるものには「ママ」と振った。
- 六、不明箇所は○で表し、推測箇所は「」で囲って表した。
- 七、本文中の挿入は《 》に入れて文章に組み込んだ。
- 八、本人による削除箇所は、読み取れるものは表示して取り消し線を引き、読み取れないものは●で表した。
- 九、消印と局名は読み取れる限りの日付を記し、切り取り箇所はその旨記した。
- 十、電報は項目を□で囲って示した。

形式

通し番号、年月日 宛名

(封筒有/無 形状 筆記具)

宛先住所

宛名

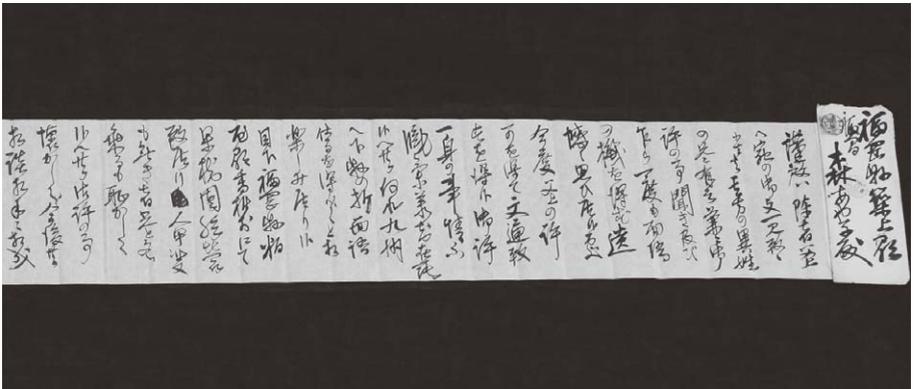
差出人住所

差出人

〔消印 日付〕

本文

〈本文〉



本文

謹啓 陳者父上

へ宛の御文一見致候

小生は其方の異姓

の兄に有之兼て御

許の事聞き及び

乍ら一度も面語

の機を得ず遺

憾に思ひ居候処

今度父上の許

可を得て文通致

すを得候御許

一身の事情不

臚氣承知在罷

候へ共何れ九州

へ下県の折面語

仕るを得べくと相

楽しみ居り候

目下福岡県粕

屋郡香椎村にて

果樹園経営

致居り候人甲斐

も無き者兄と名

乗るも恥かしく

候へ共御許の事

懐かしく今後共

相談相手に相成

一、大正五年十二月十二日 あや宛  
(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡  
福岡

森あや子殿

東京麹町区下

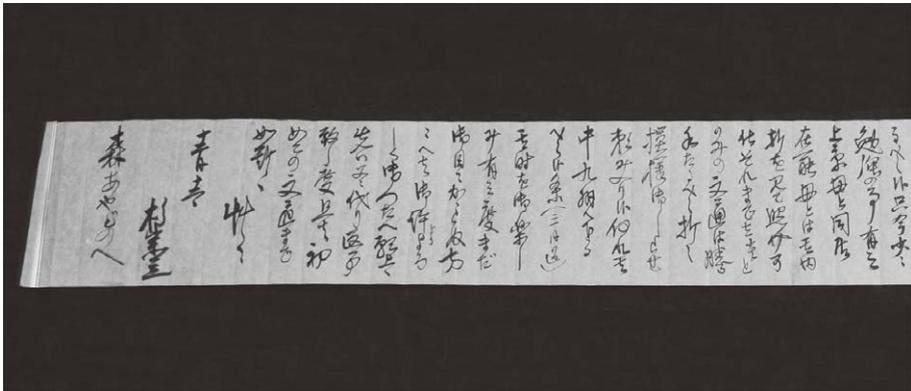
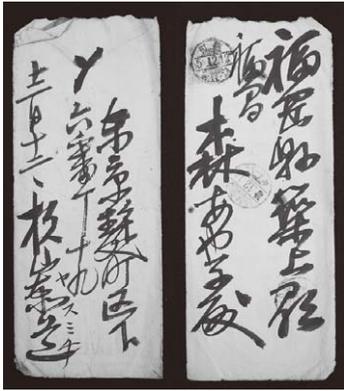
六番丁十九

十二月十二日

杉山泰道ヤスミチ

〔消印 麹町 5・12・12〕

〔消印 福岡・椎田 5・12・14〕



るべく候只今少々  
勉強の事有之  
上京母と同居  
在罷母とは其内  
折を見て紹介可  
仕それまでは小生と  
のみの文通は勝  
手たるべく折々  
模様御しらせ  
頼み入り候何れ其  
中九州へ下る  
べく候条(三月過)  
其時を御樂し  
み有之度まだ  
御目にかゝらぬ方  
々へは御許《より》よろ  
しく御つたへ願上候  
先は父に代り返事  
致し度且は初  
めての文通まで  
如斯候  
艸々  
十二月十二日  
杉山泰道  
森あやどのへ

二、大正六年一月二十六日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡

西門<sup>シモカド</sup>田村福岡

森アヤ子様

東京麹町区下

六番丁

杉山泰道

〔消印 麹町 6・1・26〕

〔消印 小倉 6・1・28〕

〔消印 福岡・椎田 6・1・28〕

本文

謹啓 御手紙

披読<sup>ヒヤク</sup>不持寒

氣御清適

奉賀候当方面

親を初め小生共

無事消光罷在

候条乍他事

御安心可有之候

実は小生今般

大至急にて福岡

へ参り一昨日

帰宅致したる

処に有之前以

而御知らせ申さん

と存じ居候ひしも

若し帰りを急

ぐ為会へなく相

成候時は却而

無念と存じ手

紙出さず候間何

卒御怨み被下間

じく不堪希望

候折柄の寒氣

折角御自愛

有之度匆々

の際乱筆御

免被下度候

頓首

廿六日 泰道

綾子様

妙な尋ね事に

候へ共御身更

生の愛読書

は何々に候哉承

り度候

三、大正六年三月十一日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

《福岡県》築上郡福岡村

森あや子殿

東京麹町区下六

十一日 杉山泰道

〔消印 麹町 6・3・11〕

〔消印 福岡・椎田 6・3・13〕

〔消印 福岡・椎田 6・3・14〕

本文

冠省

御手紙先般見申候

丁度其前より發

熱甚しく漸々

今日に到り起床

執筆するを得候

返事延引申訳

無く候病氣は

単純なる風

邪なれば御安

堵願度最早

解熱異状無

之候何か書物

をと存候へ共臥

床中不任意

其中にと存候

先者右返事

迄如斯御座候

艸々

泰道

あや子殿

今度下果致すとす

れば四月過かと存

候また如何相成るや

不明に候

四、大正六年三月十七日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡西

角田村福岡

森あや子殿

麹町区下六番

丁十九

杉山泰道

〔消印 京橋 6・3・17〕

〔消印 福岡・椎田 6・3・19〕

本文

冠省

父上の御病状

は漸次良好小生

も全快候条併

安堵願度候

父上は御許上京

御希望の事

御懸念有之乍

併之は当分小生

に御任せ有之

適當の時●

季まで御待

ち願度候委

細は福岡にて

面語の折尽く

可申候婦人

雜誌二部御

送申上候其

内適當の婦

人書有之候は、

送附可仕候

十七日

艸々

兄より

あや殿

五、大正六年四月十日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡

西角田村福岡

森あや殿

東京築地

三ノ一五

四月十日 杉山泰道

〔消印 京橋 6・4・11〕

〔消印 福岡・椎田 6・4・12〕

〔本文〕

冠省

先般父上へ御

申越の所小生より

送付致候条御

受取被下度候

武骨者の撰

扱に候間柄の

氣に入らぬもの

など多かるべ

れど彼此取り

かへでもして

辛棒願い度

候父上の御病

氣はだんだん

よろしく目下

牛肉などたべ

室内散歩

などなし居ら

れ候間あんし

んあり度候

やつと愁眉を開

き申候

不一

兄より

あやどの

六、大正六年五月二十七日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡

西角田村字福岡

森アヤ殿

東京築地三ノ

一五台花社

廿七日 杉山泰道

〔消印 京橋 6・5・27〕

〔消印 福岡・椎田 6・5・20〕

〔本文〕

梅雨近く陰

晴不定都鄙

に人心漫ろに

曇り勝ちに相成候

此間の手紙落

手持病の筆

無性ニテ何と無く

延引申訳無候

何はとまれ御許

無事精励よろ

こばしく在候

父上さしもの御重

病最名残無く

全快小々御瘡

せ相見ゆれどそれ

は御健康上

至極の善徴総テ

安堵有之度

小生も目今父上

の仕事の手伝ひ  
極めて呑気に

有之但近頃小々

田舎恋しく相成

りたるは事実

に有之今一仕事

済めば少し托鉢《旅行》

でも可仕やと相考

居候まだ御承

知無之かるべきも

小生は曹洞宗

の坊主に候条

其方は勝手に候

又折々田舎の

風情御便あり

度くせめても

の心遣りに可仕候

先者右乍延

御返事迄

不

一

二十七日

兄より

あや子どもの

七、大正六年七月十日 あや宛

(封筒有 台華社便箋 毛筆)

福岡県築上郡西角

田村

森あや子様

麹町区下六

杉山泰道

〔消印 京橋6・7・10〕

〔消印 福岡・椎田 6・7・12〕

〔本文〕

〔一枚目〕

御手紙一見御老人様御身体御工合

悪しく候趣御心ツカイの程御察し申上候

重々御大切に御介抱奉願候御好みの品

ナド何にても御申越有之度御送之申上候

サナボリ相済候由小生の香椎村の方も多分

相すみ候事と存候小生も不遠帰園緑

の中に埋まり度存居候父上臨時議

会の為急がしくして当分帰国でけぬ由

仰せられ候最早全然御快気に

〔一枚目〕

相成盛に人々を訪問又面会いたされ候小生

英語勉強不相変に候来る十四

日より近衛歩兵第一聯隊に後備

少尉として招集せられ候小々閉口に候婦

人世界の事正に領承仕候暑く

相成候条皆様わけて御老人御大切に

願度不堪希望候 艸々

月日

兄より

イモト殿

八、大正六年九月六日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡

西角田村福岡

森あや子様

麹町区下六

番丁十九

杉山泰道

〔消印 京橋 6・9・6〕

〔消印 福岡・椎田 6・9・8〕

〔本文〕

拝復

無事暮して

居ます兵隊

はすみました

お祖父様お

●大切に僕

からよろしく

と云つて頂戴

今度はこれ

丈け

さよなら

泰道

あや殿

九、大正六年十二月二十六日 あや宛

(電報 ペン)

〔受信人居所氏名〕

ニシスタムラ

フクマ

モリアヤ

〔発信人居所氏名〕

スキヤマヤ

スミチ

〔着信番号〕

八一

〔着局日附印〕

〔消印 福岡・椎田 6・12・26〕

〔発局〕

私報

カシイ局

第六一号

月日

受付 午後0時四十分

八一四二字

〔着局〕

受信 午後一時十一分

受信当務者 ○

〔本文〕

アスアサー○ジ シイ

ダ エキニテアヒタシ

。ソノヒノゴゴ 四

ジ トウケイエヒ●キエマ

ハス

一〇、大正七年一月一日 あや宛

(葉書)「下関御休泊ハ是非・駅前中谷旅

館へ」と印字) (ペン)

豊前築上郡《西》角田村

福岡

森あや子殿

杉山泰道

〔消印 下関・細江 7・1・1〕

本文

うれしかった。安心した。  
まだお腹がくるしい。  
叔父様や伯母様へよろしく。  
大〇様へよろしく。

不一

二、大正七年一月二日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

豊前築上郡西

角田村大字福岡

森綾子様

東京麹町区下六

番丁十九

一月二日 杉山泰道

[消印 麹町 7・1・3]

[消印 麹町 7・1・3]

[消印 福岡・椎田 7・1・5]

本文

新年お目出度う  
手紙正にうけとった  
文意よくわかった《一々》も  
つともな事と思ふ。淋  
しかった事と思ふ。そ  
うしてうれしかったで  
あらうと思ふ。兄も  
うれしかった。そうして  
お前に会ふてからいろ  
／＼の事を考へもし  
決心もしていよ／＼人の  
一生の味の深い事が  
わかった。殊にお前  
や兄の様な六ヶしい  
立場に生れた者は  
特別に他の平凡な境  
遇に生れたものと違つ  
て精神的の貧窮  
が甚しく從而世間の  
情義其他に關はる欲  
求や処置が他と異  
つて深く強く感ず

る事が多いもので  
ある。これは《お互ひの》幸福か  
不幸か知らぬが左様  
な境遇に生れたから  
仕方が無い。お前は今日  
まで森家と杉山家の  
陰に生きて居る人間で  
あつた。兄さんは杉山  
家と高橋家の陰に  
生きて居る人間であつ  
た。兄さんは事情止む  
を得ずして杉山家の  
表面に乗り出した。  
けれ共それと一所に杉  
山家の表裡に湧き  
起る種々の出来事  
のうち苦しいわらい  
面白く無い事柄を皆一  
身に引き受けて父と  
母とに対する情宜を  
全ふしなければなら  
ぬ身の上となつた。これ  
は世を捨て、出家す

るよりもまだ六ヶしい事である。お前に会ふ事も亦此杉山家の裡面に起つた六ヶしい事件の一つで父上がお前を自分に引渡すと仰せられたのは実に深い信用を兄にお持たせになつたのである。そうして一生を杉山家の裡面の裡に只一人淋しく暮さなければならぬお前を憐れんで此兄をせめてもの事にお前の淋しさを慰めん為に此兄をお前に賜はつたのだ。そうして亦それと同じ意味で《此》兄にお前を賜はつたのだ。他の者は我等兄妹ケツに対していろいろな観念を抱いて居る。けれ共二人の間にはこれより他に何も無い。兄は

今母上より無限の信用を受け乍ら母上より離れて母上に杉山家の暗黒面に就ては何等の心配をもせぬ様にし様と企て、居る。これが父上に対し又母上に対し無上の孝道と思ふて居る。お前と兄さんとが二人一所に杉山家の人々々々等の気が、りをも残さず一生を送る事が出来れば先以て成功と云はなければならぬ。これが人聞これが人聞の我等の様な境遇に居る者の当然の尽すべき道である。二人は此方法を講じなければならぬ。けれ共兄さんは性格は粗放であるが又他人の真似の出来ぬ特長を持つて居る。兄さん

は此特長を利用してあべこべに父上や母上の首を縮めて杉山家の陰陽に起る表裡に在る者を尽く兄さんの光りの裡に浴させ様と思つて居る。これは出来る事か出来ぬ事かわからぬ。只兄さんの値不值にあるのみ。お前は只管に唯兄さんを信頼して呉れればそれでよろしい。善悪に拘らず希望を述べてくれれば安心である。兄さんは身体●は光りの裡に在り乍ら心は蔭に居て世間を見て居る。お前は此兄さんの心地を解して呉れねば●●ならぬ。而してうか／＼した考へを持たぬ様にして貰はねばならぬ。而して人情

の隅から隅まで考へて  
 仕事をせねばならぬ。そ  
 うすれば自然と身に  
 値が付き光が出てどん  
 な六ケしい境遇に在つ  
 ても安々と切ぬけて  
 他の為を計る事が出  
 来る。これは兄さんの  
 実験である。くり返し  
 て云ふ兄さんはお前を  
 力の及ぶ限り光明世界  
 に出し度いと思つて  
 居る。それにはお前が  
 浮きくした考へを持  
 たず己を捨て、所謂  
 恭儉己を持する値  
 が無ければならぬ。  
 大変六ケしい事  
 ばかり云ふて済まぬ  
 がこれは兄さんの理想  
 だ。只二人で此通りに  
 実行したいと思ふ  
 丈だ。それ故お前

は平生は何でも構は  
 ずに我侪のあり丈け  
 兄さんに云ふがよい。他の  
 者に云ふてはならぬ。  
 そうして叔父様や  
 伯母様を大切にし  
 なさい。お前を誤  
 解する様な兄さん  
 では無い。兄さんは肉親  
 の者と垂氷の様な冷  
 やかな心を持つて観察  
 する。それ故一目見  
 たらば大した誤りは  
 無い。お前は兄さんと  
 共通の性質を沢  
 山持つて居る。それ  
 故なほよくわかる。心配  
 するな。気兼す  
 るな。兄さんも遠慮  
 も呵責もせぬ。皆様  
 によるしく云ふてくれ。  
 其中又会ひにゆく

乱筆御免

一月二日

森あや子殿

杉山泰道

思ふ事をあと先構はず皆  
書いた。わかりにくいであろう

三、大正七年一月十一日 梅松宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

豊前国築上郡

西角田村福岡

森叔父上様

東京麹町区

下六番一丁

十九 杉山泰道

〔消印〕 〇〇7・1・13

〔消印〕 福岡・椎田7・1・15

〔本文〕

冠省

陳者綾子事

結婚の儀於当

方種々調査仕候

処あまり面白か

らぬ人間と被為存

候間御取止め被下

度あの様な東

京や朝鮮あた

りをうろつく人物

よりも御地方にて

身分は低く共間

違ひ無き人物を

於貴殿御選み

被下度と父より

の希望に候不取

敢右御通知申上候

不

一月十一日

泰道

森叔父上様

いろく御心配かけまして

すみませぬ

三、大正七年三月十一日 あや宛

(葉書 毛筆)

福岡県築上郡

角田村福岡

森綾子殿

〔消印 九我 7・3・11〕

本文

冠省左記へ転住

東京麹町区飯田

町二ノ五三

杉山泰道

四、大正七年三月十六日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

豊前国築上郡

角田村福岡

森あや子殿

東京麹町

区飯田町二ノ五三

杉山泰道

〔消印 〇〇7・3・16〕

〔消印 福岡・椎田 7・3・18〕

本文

冠省

御手紙拝見御

許よりは此間書

物の受け取りの

外一ツも手紙参

らず不思議に

候到て健康なれ

ば叔父上共に御

安堵あり度く候

妻帯の事まだ

何処へも発表

せず故に知らせ

らせざりし処

意外の処より

發覚赤面致候

其中あはせ可申

候叔父上によろしくまた叔父上の

御名前相忘れ候

何と申候

哉序の折知ら

せて被下度候

頓首

泰道

あや子殿

一五、大正七年四月二十日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡

西角田村福岡

森あや子殿

麴町飯田町

二ノ五三

廿日 杉山泰道

〔消印 京橋7・4・20〕

〔消印 京橋7・4・20〕

〔消印 福岡椎田7・4・22〕

本文

其後御無沙汰致

候叔父上に度々の手紙

にて元気の趣承知

喜ばしく存候当

方も最早淋さ

も大分薄らぎ皆々

元気に有之父

上も近頃は露西

亜其他の騒動に

就お話にならぬ程

の多忙にてお気の

毒に不堪候乍併

御元気は非常

に候間呉々も安心

あり度く候縁辺

の事申越の向は

申す迄も無く止め

た方よろしくと存

候何しろ父上は承

知の通の無鉄砲にて

あと構はずにあ

ばれ居られ此兄

も亦一生貧乏を

覚悟致居候得

者御許も今

より覚悟して

篤実なる人物

を見定めて結

婚ある可く小生も

出来る限り助

力可仕候叔父上

様にも何卒よろ

しく御伝声不堪

希望御許にも

追々多忙と相成

可候間何卒

身体を大切に

精励あり度く候

廿日 敬具

兄より 森綾子殿

一六 大正七年七月八日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡

角田村福岡

森あや殿

東京麹町

区飯田町二ノ

五三

杉山泰道

〔消印 ○○ 7・7・8〕

〔消印 福岡・椎田 7・7・10〕

本文

伯父様によろしく

拝復

手紙ありがとうございました

こそ御無沙汰した

気分勝れぬとは

何様あるのか病氣

ならば病状知ら

せて貰ひ度し

写真はうけとつ

た。実物とすこしも

ちがはぬ。

をのづからまじとを

へうつし絵のをのづか

らなるおもかげ●に

うちむかひつ、

ほ、ゑむはた

れ

早くうけとりを出すの

をわすれて居た。

序に此方のも送る

のを忘れて居た。済

まぬ事をした。

焼き増しをこし

らへてすぐ送る。

前以て断つて置く

が実物●よりもずつ

とよく出来て居る。自

分は役者の様になり

クラは人形の様になり

て見える。これは断

るには及ばぬかも知

ぬが念の為云つて

置く。今年中に

は夫婦で九州に

かへる。其時に会

ふ。雑誌は行つ

て居るか。

とにかく身体を丈夫に

せよ

泰道

あやどの

一七、大正七年七月十二日 梅松宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡

西角田村福岡

森梅松様

東京麹町区

飯田町二ノ五三

十二日 杉山泰道

〔消印 京橋・築地 7・7・12〕  
〔消印 福岡・八屋 7・7・10〕

〔本文〕

冠省

御不幸の御趣

本日父より拝承

驚入り候小生も

此間より愚弟を

喪ひ候者不《堪》御同

情撫かし御力

落しの御事と

拝察仕候誠に

軽少に●御座候

へ共別紙為替

券面何卒御

霊前の御用に

御立て被成下度

父の命に依り御

送付申上候御

落胆のあまり

御障り共無之  
様御大切に被遊

度之のみ偏に

奉願候

敬白

十二日

杉山泰道

森梅松様

一六、大正七年八月十二日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡県築上郡

西角田村福岡

森あや殿

東京麹町区

飯(田町)二ノ五三

杉山泰道

〔消印 麹町 7・8・12〕

〔消印 福岡・椎田 7・8・14〕

〔本文〕

拝復

いまたいへんいそが

しい此間父上か

らおまへに返事

出せといふて手

紙費ふて出す

ことを忘れた今

思ひ出したがおま

への方から何を

尋ねて来て居た

か手紙も何も無く

してわからなく

なつた何でも東

京の様子おみ

まひであつたと思

ふから其積り

で返事出す

東京は皆無

事僕は今

月うちに九州

にかへる積り併

しどうなるかわ

からぬ身体  
を大切にせよ

叔父様に  
よろしく

十二日

兄より

あや殿

一九、大正七年十月五日 あや宛

(葉書 鉛筆)

筑上郡西角田村

福岡

森あや殿

〔消印 福岡・香椎 7・10・6〕

〔本文〕  
拝復手紙ありがとういろいろいそがし  
くて手紙出さ

ずに居た。無事で結構。種々話し度い  
事もある

故其中ゆく積りだ。クラよりもよろし  
くといふて

居た。伯父上様にもよろしくと申上げ  
て呉れ。

今来客故此度はこれ丈け

十月五日

泰道

二〇、大正七年十一月九日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆)

筑上郡西角田村

福岡

森綾子殿

粕屋郡香

椎村唐原

十一月十日 杉山泰道

〔消印 〇〇 7・11・10〕

〔消印 福岡・椎田 7・11・11〕

〔本文〕  
冠省

当地は今稲刈最  
中皆達者に候間

安心あり度く候  
過般父上に御面

語の折御許の縁

辺の事御話申上候

処御許の健康

上差支無之や否

や取調べよとの事

妙な事を仰せらるゝ

と思ひ乍ら其俣致

居候処今思ひ出し

候間一寸御尋申上候

森叔父上様より

此間御招きを受け

しも行く事能はず

遺憾に存居候其

中今一度参上可

仕何卒よろしく御

つたへ頼入候追て

寒く相成候間身体

氣をつけらるる可く

先者不取敢右要

々迄如此御座候

頓首

九日

杉山泰道

あや子殿

三、大正七年十一月十二日 梅松宛

(封筒無 卷紙 毛筆)

本文

拝呈

其後は御無音申上

候処益々御清

穆奉大賀候降

而当地事皆以御

蔭無事消光罷在候

間乍他事御休

神被下度候陳者

本日父より書状到

来綾殿結婚に関

する貴下の御書状封

入賛成の意を述べ

たる父の手紙《共》封入致し

あり候右尽く披見

致し候処誠に

結好なる良縁と

被為存候間謹而

御同意申上候綾

義骨肉別けし兄

弟とは申乍ら兄甲

斐も無之唯々今日

迄貴殿の御芳情

に甘へ御任せ申上候処

遂に比運に立到り

候事小生としても感謝

之に過ず唯々比

後共々同行の行末

千秋万歳ならむ事

御互様々万折仕る

次第に御座候何れ

貴下及先方様へ

も拝眉の折有之べく

其折万事《を》尽す心

組に有之不取敢

右要々申述度

如比御座候

頓首

十一月十二日

杉山泰道

森梅松様

二白

乍御手数別紙

綾儀へ御渡し

奉願候

三、大正七年十一月十二日 あや宛

(封筒無 卷紙 毛筆)

本文

冠省

此前の手紙取消

申候委細は叔

父様より聴取あ

り度く此上は左

の覚悟を以て終

始あり度く希望

仕候

運不運は天命也

幸不幸も天命也

真心を以て尽して

わからぬ人間無く

死ぬ覚悟で行つ

て出来ぬ事無し

前の事を考へず

取越苦勞せず

眼の前の事を懸

命に働け

「女は夫任せ夫は

天任せ誠意を

尽して笑つて暮せ」

兄甲斐も無き兄

なれど右の忠告

忘れて賜はるまし

く候

頓首

十一月十二日 泰道

綾子殿

(封筒有 卷紙 毛筆)

福岡市博多千歳

町二丁目釘甚内

渡辺あや様

東京麹町

区飯田町二ノ五

三

廿九日 杉山泰道

〔消印 京橋 8・1・30〕

〔本文〕

拝呈

御結婚無事相済

候御趣先以而祝

着仕候不在の為

御手紙只今落手

何れ帰郷の上御

面語の節委曲

を尽し可申候

まだ拝眉の栄

を不得候得共御

主人様へも何卒

よろしく御風声

被遊度先者不

取敢御祝儀旁

御返事迄如此

御座候

頓首

廿九日夜

杉山泰道

森綾子様

御許に

二四、大正八年二月十六日 安雄宛

(封筒有 卷紙 毛筆)

博多千歳町二

釘甚方

渡辺安雄様

柏屋郡

香椎村

二月十六日

杉山泰道

〔消印 〇〇 8・2・23〕  
〔消印 〇岡 8・2・23〕

本文

冠省  
御来書難有  
拝被仕候実は早速  
速当方より御挨拶  
申上げむと存居候  
処過般来上  
京中留守居の者  
チブスに相掛り  
《帰郷》  
最早恢復期に  
入り候へ共何分手  
放し難く何れ全快  
の後御伺申上る筈  
にて失礼致居候  
処貴方より御来書  
重々御詫申上候  
殊に御叮嚀なる  
御言葉不堪慚愧  
不思議なる御縁  
不浅

奉存候何れ拜眉  
の上万々相尽し候  
べく右事情御

諒恕の上不悪御  
宥恕奉願候  
乍末筆御令  
闔様へも不悪  
御風声被成下  
度追而時下  
時疫流行の折  
柄何卒御自愛  
專一に被遊度  
不堪万折候  
先者不取敢右  
御返事旁  
御挨拶迄如  
比御座候  
頓首  
二月  
十六日  
杉山泰道  
渡辺安雄様

三、大正八年五月十四日 あや宛  
(封筒有 巻紙 毛筆)

福岡市西小姓町  
五 林田様裏  
渡辺あや様

粕屋郡香椎村  
五月十四日 杉山泰道

〔消印 〇〇 〇・5・17〕

本文

拝呈  
御手紙拝見致候  
此間は参上仕り種々  
御厄介に相成り難有  
奉存候近頃気  
分不宜敷御趣  
併しそれは御承知  
か知らねどつはりと  
いふて目出度き事  
の前には必づあるもの

故心配無用に御座候内の者は嘔吐は勿論ヒステリー状になりて家出せんとし又は身体中が抜ける程だるくなりて物を考へる事が出来なくなり其他いろ／＼の事が起りてどうしてよいやらわからなくなるものに候併し六ヶしき事には無之唯当り前にしてどんな事があつても落ちついて御飯をたべて居ればよろしく運動せぬ事と心配する事が大毒故其心がけ肝要に候殊に小供が母胎に居る間の母の心がけは生児の性質の大

本を成す者に候間

其心掛肝要に

候書物は其中持

参可致税関の

かへりに新聞社

へ来られてもよろしく

候其中尋ねて参

るべく御馳走奉

願候乍末筆

御主人様へもよろしく奉願候

頓首

五月

十四日

杉山泰道

《渡辺》森あや殿

二六、大正八年十月二十七日 渡辺御夫婦

宛

(封筒有 卷紙 毛筆)

福岡市西小姓町

林田方

渡辺安雄殿

粕屋郡香椎

村

杉山泰道

〔消印 福岡・香椎 8・10・27〕

本文

冠省

相浦病院

の院長さんに

相談致置候間

此手紙着次

第見せてお出

被成度候小生風

邪漸く全快

用心申し候

艸々

二十七日

杉山泰道

渡辺御夫婦

様

三七、大正十四年十二月二十六日 あや宛

(封筒有 巻紙 毛筆 書留)

〔破損〕門) 司市大里馬寄

草場

森あや子殿

福岡県粕屋

郡香椎村

杉山泰道

〔消印 香椎 14・12・28〕

〔本文〕

拝復

愉快な手紙が来て

嬉しかったまだ一本

立出来ぬ此方が恥

かしいどうぞ其意

気をうしなはず奮

闘してくれ蔭乍ら

手を合せて拝んでゐる

一心のほか味方無し

今年は忙がしいのは

忙がしかつたが家内中

〔幸に〕無事で年を越す

と思ふてゐたら一週間

前から風邪を引いて

それから中耳炎にな

つてやつと全快して帰

つたばかりのところだも

う今年は働らかずに静

養して年を越す積り

だ其他の連中は又非

常な元氣だそつちも

子供は大きくなつたらう

見たい／＼と思ひ乍ら今

年も暮れるまあ

御機嫌よく年を

お取り安雄君へも

ほんとに御無沙汰して

ゐるどうぞよろしく

別封の為替貧乏

兄で何も出来ぬから

只気は心の前祝の印に

送るサカナでも買ふて

たべてくれ

頓首

二十六日

杉山泰道

森あや子殿

〔順番不詳書簡〕

イ、一月一日 あや宛 (葉書 毛筆)

福岡県築上郡

福岡

森あや子殿

〔消印 切取〕

〔本文〕

〔切取〕恭) 賀新禧

一月一日

杉山泰道

口、安雄宛 (封筒有 巻紙 毛筆)

福岡市西小姓

【切取】坂本ウラ

渡辺安雄様

粕屋郡香

椎村

杉山泰道

【消印】切取

本文

拝啓

此間からは度々の御  
出に失礼ばかり致し  
申訳無之実に  
息もつかれぬ忙かし  
さ其代り病後の衰  
弱も近頃は何処へや  
ら不幸中の幸に候  
順一君日に増し御成  
長の事と相察小生  
方のも同時に節句  
を迎へ可申折ふし

の快晴御同伴御

来遊奉待候御来

書拜披御申越の

事共委細承知仕候

但何ならば貴方より

直接に東京へ御

問合せ被成候てもよろ

しく候併し本日貴殿

の手紙同封にて東京

へ郵書出し置候間

不日返事参る事

と愚考仕候御令

聞へよろしく御風声

被遊度殿先は不取敢

右御返事迄如

此御座候

泰道

渡辺安雄様

ハ、安雄宛？（封筒無 卷紙【破損】

毛筆）

本文途中から

〇〇〇（よく〜考）

えると実に不思議

な心細い様な可

笑しい様なものに候

まあ〜お互ひ

に懲役に行かずに

生きて居て時々

顔を見て笑つて居

り度く候

綾殿の育児法と

小生の育児法とは

正反対に候男の

子に候へばもつと雨

風に当て、おきたひ

なさしるべくそれで

死ぬやうなら《生きても》役に

立たぬ子に候兵

隊に行くまでは吾

かものと思ひたま

ふな女親の愛は

よく子を害ふも

の  
に  
候

森  
兄

〔御〕  
机  
下

頓  
着  
泰  
道